

タヒチとハイチを間違えて

松本侑壬子・ジャーナリスト

日本映画の海外ものも、当節は随分身近になった。それだけ地球が狭くなったからとも言えるだろう。この映画のヒロイン・幸子（小山田サユリ）は、外務省から在外公館派遣員として赴任するのだが、応募の面接で行く先の志望を「タヒチ」と間違えて「ハイチ」を選んでしまった。

まさか！南太平洋の楽園とカリブ海に浮かぶ“西半球の最貧国”とを間違えるなんて！外務省派遣要員がそんなノータンキでいいの？—けれど、まあまあ、このぼのぼのと痛快な映画を見ているうちに、それでもいいじゃないか！という気になってくる。

現地の日本大使館では、たった4人の大使館員の1人として、幸子も懸命に公務をこなす。長らく続く政情不安から産業も農業も立ち遅れ、経済は破綻寸前のこの国は、まず経済的自立が求められる。小学校の調査の帰りに車が故障したことから、幸子はジャックという少年と出会う。貧しい中でもせめて小学校に通えるジャックはまだ幸いな方だが、ノートを買う余裕はない。貧富の差も自分の立場もわきまえて、だから一生懸命勉強して母親を楽にさせてやりたい、と語るジャック。その瞳は生き生きとして、貧乏という言葉から来る暗さはない。何とかこの国の子どもたちの力になりたい、と思う幸子。そして、ある日、幸子が偶然目にした奇蹟のバナナ（題名）のアイデア。

バナナの木や葉っぱの繊維から紙ができるという話を、日本から送ってきたビデオの画面から偶然知ったのだ。取り立てて産業とてないこの国でも、バナナだけは無尽蔵に近いほどある。実をとっ

た後は木も葉も無造作に捨てられているバナナを使って、紙をつくり、生産を軌道に乗せれば…？

よし！このアイデアこそ、ハイチの人々を貧困から引き上げる、まさに奇蹟ではないか！思ってもみなかった地球の裏側の太陽の下で、幸子24歳は俄然、燃え上がった。やせっぽちのいたずら少女のような頼りなげな幸子が、目をいっぱいに見開いて奇蹟のバナナ＝紙づくり実現に向けて走り回る。

一度帰国して、愛知・岐阜の伝統和紙の工房を訪ね、紙漉き名人・山村（緒形拳）を説得、重い腰を上げさせ、ハイチへ連れて来ることに成功する。この歳になって何で地球の裏側まで？と渋っていた山村だったが、空港からの道すがら、瓦礫の間に人々のひしめく市場を一目見て、「これは、戦後の闇市と同じだ」と頷く。それからぐんぐんバナナ・ペーパーづくりにのめり込んでいく。小学校の校庭で、大人も子どもも一緒に手作りの水槽からバナナの繊維＝紙の素をすくい上げ、真っ青な空の下に、赤い屋根の上にまで並べて干す。貴重な紙がどんどん出来てきて、うれしくなったみんなが思わず踊り出す…。山村もはち切れんばかりの笑顔だ。それは「日本ではね、交通事故で1万人もの人が死に、自殺する人は3万人もいるのよ」という幸子の言葉に、「日本人は、かわいそうだね」と大使館の現地人職員フィリップ（アドゴニー）がため息をつく場面と対照的だ。

普通の若い女性が夢をあきらめず、極貧の国で周囲の協力を得ながら実現していく話だが、図らずも日本の豊かさとは何かを考えさせられた。



日本映画（105分）／錦織良成監督

『ミラクルバナナ』

9月16日よりシネマート六本木（東京）他全国順次ロードショー



©2005 ミラクルバナナ制作委員会